

滋賀大学経済学部後援会だより

発行／彦根市馬場一丁目1-1 滋賀大学経済学部後援会 発行責任者／戸田 茂
URL: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=31>

目次	
大学改革、学部改革にのぞむにあたって 1	資格取得等報奨制度の創設 4
学生活動 3	経済学部OB・OGの声 5
	ゼミナール紹介 7

大学改革・学部改革にのぞむにあたって

経済学部長 小倉明浩



後援会会員の皆様は、平日より本学部の教育に温かいご支援を賜っており、心より感謝申し上げます。

御礼申し上げます。正課授業の質の向上、キャンパス・アメニティの改善、正課外活動の支援等、学生生活の多様な局面で、国の予算では手が届きにくいきめ細やかな部分での支援をいただいております。また、新設された資格取得等報奨制度のように、後援会の皆様からの新しい支援の企画も実現いただいております。共に教育改革を考えていくパートナーとして、経済学部にとって欠くことのできない存在であります。さて、目下国立大学法人は、国の厳しい財政状況の中で、「効率的」に教育・研究の成果をあげるシステムへの転換を遂げる改革が求められています。18歳人口が減少している中で、現状の国立大学システムを維持することが、国の視点から見て投資に見合う成果があることなのか

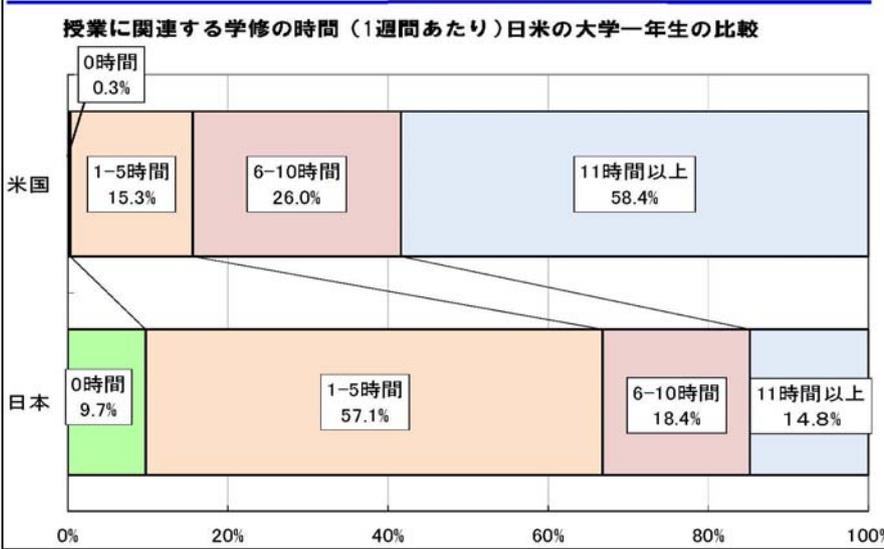
どうか問われているとも言えましょう。もちろん、現在のこのような議論は、現役学生の皆さんが在籍している期間中に、何か大きな変革が滋賀大学や経済学部にもたらされる、ということではありません。ただ、自分の出身大学のブランド価値というのは卒業後もついて回るものです。しかもその価値は自分が在籍していたときの価値で固定しているわけではなく、その時々々の価値の推移が響いてくるものです。つまり、卒業後であっても、出身大学のイメージが上昇すればプラスに働き、下降すればマイナスです。それゆえ、大学改革をしっかりと進め、滋賀大学経済学部のブランド価値を維持向上させていくことは、過去から未来へと続く本学部卒業生への責任を果たすことであり、当然に現役学生の皆さんにもプラスになることです。国立大学が改革を求められる背景には、国の財政状況、18歳人口の推移という大きな日本経済の状況があります。少子高齢化の急激な進行による社会保障費の拡大は財政に対する大きな圧力になっています。日本は諸外国と比較して、高等教育に決して大きな予算を投入しているわけではなく、むしろ最も低いレベルにあると指摘されています。しかし、財政の視点からはその予算額でさえ「無駄を省く」ことが求められているのです。また大学の需要を支

える18歳人口も、1990年代初めには約200万人でしたが、現在は約120万人です。これに対して国立4年制大学の入学定員は約10万人で維持され続けており、18歳人口が減少している中でこの規模を維持する必要があるのか、ということが問われているわけです。要は、このような状況の中で、財政資金を投入しつづけるには、国立大学が社会での役割を担う機能の強化が求められている、というのが財政側の視点です。教育の面の機能強化の方向としては、世界を舞台に活躍するグローバル人材の育成、新たな価値を創造するイノベーション人材の育成、地域への人材供給の役割を強めることが求められています。国境を越えた競争が激しくなっている今日、単なる語学力を超えたコミュニケーション能力やグローバルな視点で問題をとらえ構想する能力は、世界レベルの企業で活躍する人材にも地域で活躍する人材にも等しく求められます。また経済が停滞する日本経済・地域経済にとって、新たな価値創造の開拓を担う人材の育成が求められているのです。本学部は、これまで専門知識、問題意識、見識の『3つの識』を備えた高度専門職業人の養成を図るべく教育活動に取り組んで参りました。その点では、この新しい教育改革への社会の要請に十分に応えようとい

う自信を持っています。「専門知識」の基礎を鍛える『コア科目制度』、「幅広く総合的な問題意識」を培う多様な『学科構成』、そして「自らが主体的に解決策を創造していく見識」を育む演習やプロジェクト科目などの『実践型教育プログラム』が整備された教育プログラムを有しています。

しかし改革課題は、このような教育や制度のシステム整備の側面についてだけ指摘されているわけではありません。現在大学の教育システムが批判されている点で、最もわかりやすいものは、学生の学習時間に関するものです。いくら制度やカリキュラムを整備しても、学生が勉強をしなければその効果は現れません。よく比較されるのは、アメリカの大学生との差です。図のように、アメリカの大学生では、6割近い者が授業に関連する学習を1週間に11時間以上行っています。6-10時間の者でも4分の1に昇ります。それと対照的に日本の大学生は、5時間以下の者が3分2を占めるのです。週5日制で考えると5時間という回答でようやく1日あたり1時間の学習にすぎません。日本の高校生の自宅や塾での学習時間を考えれば、アメリカの数字ですらそれほど大変な学習時間ではありませんから、日本の大学生は「どうなっているの!!」と、改めて問題になっているのです。本学部は、様々な授業時間外での自主的学習を促す取り組みを行っ

学生の学修時間の現状



文部科学省資料 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/attach/_icsFiles/afieldfile/2012/07/27/1323908_2.pdf) より抜粋

て来ていますが、本学部内の調査結果は、この平均的日本の大学生像の例外ではないことを示しています。複雑な現代社会に対応する『見識』、人間力といってもよいでしょうが、を育むには、単に大学の教室で学習し、その予習復習やテスト対策に励むだけでは、十分ではないことは明らかです。クラブ活動や、アルバイト、友人関係など大学生としての『自由な』時間をいかした学生

生活は、『見識』、人間力の形成になくてはなりません。しかし、日本の大学は、あまりにもそのことに甘え、学生に勉強させること、勉強に誘うことをおろそかにしてきたのではないかと批判されているのです。人材育成が、学生としての『自由な』時間を確保させるだけで可能であるとすれば、高額な授業料や国の資金投入は必要ないでしょう。その点からいえば、改めて大学における「教育の価値」が問われているので

「大学生は勉強をしない」という、おかしな「常識」を変革していくことが求められているのです。

このような課題に取り組むためには、科目編成や卒業の条件の設定など教育プログラムの制度改革だけでは十分ではありません。各教員が授業と関連した授業外の学習を促すことを意識した授業運営や成績評価方法へ移行していくこと、授業外学習も大学教育の一環に取り込むような仕組みの構築が求められます。

このような改革は、学生の皆さんには、大学での学習が少し厳しくなった、と感じられるかもしれません。けれどもこの方向での改革の目的は、大学での学習の楽しさを発見、享受してもらうことにあります。この目標が実現すれば大学生としての『自由さ』の価値が数段高まり、本学部が目標とする『3つの識』を備えた高度専門職業人の養成がより一層高いレベルで達成されると考えています。そして、以上のような改革を進めていく上では、後援会の皆様のご理解とご支援は不可欠の要件です。今後とも本学部の教育活動を暖かく見守ってくださることをお願いいたします。

学生生活動

漕艇部 創部90周年を祝う

去る10月18日(土) 滋賀大学経済学部講堂及び彦根ビューホテルにおいて、滋賀大学経済学部漕艇部創部90周年記念式典が開催されました。

式典に先立ち、アテネ、北京2大会連続100m・200m平泳ぎ金メダリストの北島康介選手をはじめ、多くのオリンピック選手の指導にあたられている、競泳日本代表ヘッドコーチ 平井伯昌氏を講師にお招きして特別講演会が経済学部講堂において開催されました。

平井講師には、「一流選手育成秘話とその方法」という演題で講演いただき、日本代表選手の練習の様子や自身の経験、さらには選手とのユーモアあふれるエピソード等も交えながら楽しい講演となり、終演後



挨拶される北居会長



平井氏のご講演

には参加者から惜しみない拍手が送られました。

引き続き、会場を彦根ビューホテルに移し、創部90周年記念式典、祝賀懇親会が開催され、漕艇部OB諸兄、来賓、現役部員、大学関係者等々を含め約300名の列席の下、終始賑やかな会が催されました。

漕艇部OB会(陵水艇友会) 北居会長の挨拶に始まり、佐和学長、吉川顧問教員、来賓等からの祝辞に続き、北居会長から本年を「創部100周年に向けてのプロローグ」と位置付け、地方大学の一学部だけの漕艇部でも高い目標、厳しい練習と強い意志を持つては、全国でも勝てるという伝統的な部の信念を想起し、古豪復活に挑戦しようとの決意のもと、今後の経済学部漕艇部のあり方や到達目標「3年以内の男子エイト、女子クオドルプルの関西選手権優勝!、100周年までに全日本学生選手権の優勝!」が示され、今後とも、OB、現役部員共に心を一つにして一緒にインカレ優勝を夢から



祝賀懇親会での集合写真 (あまりの盛況! 写真撮影も3回に分けて)

現実には手練り寄せましょう!と決意と激励の言葉が述べられました。今後、100周年に向けて、経済学部漕艇部のますますの活躍が期待されます。

鉄道研究会の活動

経済学部サークル「鉄道研究会」は、現在27名の部員で活動しています。

年に数回、機関誌『いぶき』を発行し、会員による旅行記、随想、特定のテーマに基づく報告等を掲載し、マニアックな内容で鉄道ファンからは大変好評を得ています。

鉄道模型(Nゲージ)の制作



鉄道研究会HP <http://surc.jimdo.com/>

また、春の開学祭や秋の滋賀大祭、時には彦根駅前のアルプラザ平和堂特設ブースにおいて、鉄道模型(Nゲージ)を展示し、来場者の大人から子どもの方まで、大変好評を博しています。ぜひ一度見てください。最大、畳8畳くらいの大きさで電車はもとより、駅舎や町並み、トンネルなどもあります。ちよつとした一大都市空間です。目線を低くして見ていただくと、電車口マンに浸れます。必見ですよ!

今後も、皆様からの要望等もお聞きし、より充実した内容で機関紙『いぶき』の発行を続けていきます。また、鉄道模型(Nゲージ)もどんどん大きくしていく予定です。もちろん新型車両の模型も投入していきます。これからも私達の活動を見てください。応援よろしくお願ひします。

資格取得等報奨制度の
創設について

「滋賀大学経済学部後援会資格取得等報奨制度」の創設については、本年4月、入学式の際に開催しました後援会総会においてお知らせしましたが、その詳細が決まりましたのでここに紹介いたします。

本制度は、下記のガイドラインに記載のとおり、学生諸君の日頃の勉学等を支援し、資質向上に資することを目的とするもので、自身の勉学等に対する努力に対して、「後援会等に対する努力に対して」、「後援会からも僅かながらでもの励みとなるような支援ができないか」というところから創設の運びとなったものですので、多くの学生諸君が応募していただけるよう願っています。

学生諸君には、別途、大学内においてお知らせしていますが、保護者の皆さまにおかれましても、ご覧いただいた上で、お子様にお伝えいただきたいと存じます。

なお、制度の対象となる資格等や金額につきましては、今後運用を重ね、より良き制度に改善して行きたいと考えておりますので、会員の皆さまから是非ともご意見等お寄せいただければ幸いです。

【お問い合わせ】

滋賀大学経済学部総務係

TEL. 0749-27-1030

滋賀大学経済学部後援会資格取得等報奨制度

平成26年10月 1日

1. 趣旨

この制度は、スポーツ・文化活動、勉学等で顕著な功績を残した個人、もしくは団体を報奨することにより、学生の日頃の勉学等を支援し、資質の向上に資することを目的とする。

2. ガイドライン

滋賀大学経済学部後援会資格取得等報奨制度の運用にあたり、次のとおりガイドラインを定める。

申請記号	分類	サポート対象事項	基準	報奨額(円)	備考
1	資格試験	税理士試験	「簿記論」、「財務諸表論」のいずれか1科目合格者	80,000	
2		公認会計士試験	「短答式試験」合格者	100,000	
3		日商簿記検定試験	「一級」合格者	50,000	
4		証券アナリスト試験	「第1次レベル試験」合格者	30,000	
	「第2次レベル試験」合格者		40,000		
5	語学試験	TOEIC (公開テスト) (原則として、編入学試験又は帰国子女入試枠での入学者及び外国人留学生は除く。)	800点以上	50,000	
6	留学	本学交換留学制度に基づく海外留学 (平成26年4月1日以降出発者)	アジア圏	40,000	
			その他	80,000	
7	その他	スポーツ・文化活動、勉学等で顕著な功績を残した個人、若しくは団体、又は、上記「1」～「5」に相当すると思われる事項	申請に基づき、後援会役員会で審査のうえ、決定する。		

注) ① このガイドラインは、平成26年4月1日から実施する。

② 「資格試験」については、同一基準での申請は、学部及び大学院在籍期間中を通じ、1回限りとする。

③ 「語学試験」については、同一言語での申請は、学部及び大学院在籍期間中を通じ、1回限りとする。また、試験言語を、母語とする者は申請できない。

④ 編入学試験又は帰国子女入試枠で学部に入学者及び外国人留学生が、語学試験で申請する場合は、事前に問い合わせることとする。

⑤ 後援会費を未納の場合は対象としない。

⑥ 報奨額については、経済学部後援会役員会の議を経て調整することができる。

⑦ 本ガイドラインの改廃は、経済学部後援会役員会の議を経て決定する。

経済学部
OB・OGの声

多くのチャレンジができた学生時代

OTTO株式会社リテール販売本部

小森 早夕里

平成24年度 経済学部社会システム学科卒業生

自己紹介と仕事について

はじめまして、平成24年度滋賀大学経済学部社会システム学科卒業生の小森早夕里と申します。

私は現在、OTTO株式会社で商品企画や販売戦略に関わる仕事をしています。具体的には、水回りの空間をもっと快適に使うべく、今後どのような商品が必要か、お客様目線を日々意識しながら仕事をしています。また、弊社の取り組みや商品を紹介する展示会の企画業務にも携わり、多くの方々にOTTO商品の技術力や魅力をお伝えする業務にも取り組んでいます。今年度は幕張メッセでの展示会の運営を担当させて頂きました。日々、学ぶこと、考



澤木ゼミナール（卒業式にて）

えさせられることばかりですが、上司や同僚の先輩方にご指導頂きながら充実した毎日を過ごしています。今後は日本のものづくりに関わる者として、世界に日本の水回り文化を広く発信できる仕事ができればと思っています。

大学時代について

私の入学当初からの目標は「何事もチャレンジすること、そして幅広い価値観・知識を養うこと」でした。学業においては一つの分野に偏ることなく、幅広い講義を受講し、様々な視野や価値観を培ってきたと自負しています。滋賀大学は経済学

以外にも多岐に渡る講義が開講されている大学だと思えます。この特性を活かして、ぜひ幅広く講義を受講して頂きたいと思えます。また、ゼミ活動でも仲間とプレゼンテーション大会に向けて震災復興ビジネスプランの立案に取り組み、様々な考えを持つ仲間と議論し、切磋琢磨しながら活動ができたと思っています。学業以外にも学園祭実行委員長や短期留学、趣味の海外旅行と、日々、チャレンジと価値観を広げることが意識し、学生生活を送っていました。

特に3年生の時の学園祭実行委員長にチャレンジさせて頂いた経験は私にとって貴重なものとなりました。お客様目線を考えることの難しさを痛感し、現在の仕事にも大きく繋がる経験になったと思っています。

在校生へのメッセージ

「興味のあること、やってみたくと思う事には積極的に取り組んでください。」

多くの皆さんにとって学生時代ほど自由に使える時間がたくさんある時期はないと思います。この貴重な時間を使ってぜひ興味を感じたことに全力で取り組んでほしいと思います。ゼミや部活動などの課外活動に打ち込む、興味のある分野を研究してみるなど何かに積極的にそして一生懸命、取り組んでください。限りある時間を思いっきり使ってほしい

と思います。何かに一生懸命取り組んだ経験は社会人になってから大きな自信となり、自分の糧になると思えます。社会に出ると、辛いことや困難にぶつかるとは幾度とあります。それでも学生時代に一生懸命にやった経験は皆さんの支えになると思えます。また、私も含め、まだまだ社会には未知なことがたくさんあります。大学を卒業した今、もっと勉強しておけば良かった、もっと色々な経験をしておけば良かったと後悔することがたくさんあります。だからこそ、在校生の皆さんにはもっと色々な事に取り組む、価値観や知見を養ってほしいと思えます。

私もまだまだ若輩ものですが、これからも皆さんに負けたくないよう日々精進していきたいと思っています。未来ある皆さんには人生の選択肢がたくさんあります。大学生活を一つの通過点にするのではなく、何か達成感を持つように実りある大学生活を過ごしてください。



友人とのトルコ旅行

未来への道標となった学生時代

株式会社京都銀行証券国際部

永谷 惟尚

(平成15年度 経済学部経済学科卒業)

自己紹介

私は平成15年度経済学部経済学科卒業生の永谷惟尚と申します。京都銀行に入り早や10年が経ち、中堅社員として、日々仕事に励んでいます。銀行の仕事と言えば、お客様からのお金を預かる「預金」、お金を貸す「融資」をイメージされると思いますが、現在、私は証券国際部で株式や債券に関する仕事をしています。

大学生活

4年間の学生生活の中で最も印象的な思い出は、2回生の春休みの2ヶ月間をスペインで過ごしたことです。その期間に自分の考えのベクトルが少し変わったと思います。経済学科なのでマクロ・ミクロ等はもちろん、ドライブがてら天津の教育学部や滋賀県立大学まで授業を覗きにきました。



スペイン闘牛場にて

多くの科目がある中、一番関心をもち熱心に履修したのはなぜか第二外国語のスペイン語、指導教員の勧めもあり同地を訪れました。スペインは各地に世界遺産や古い町並みが残り、歴史・文化と現代社会のバランスがとれ、人々は地域に根付いた生活をしており、精神面で豊かな国だなと強く感じました。そのためか帰国後は地元京都に関心を抱き、京都を軸に何か出来ないかと考えるようになり、縁あって京都銀行に就職しました。

私のように学生時代のみとしたりきつかけが、将来への道標につながらることも有ると思います。素直な気持ちで色々な体験を積むことで未来は広がるのではないのでしょうか。

社会人となり

この10年間で私にとって二度の大きな転機がありました。

一つ目が第二の故郷、彦根での支店開設です。まさに「アウエー」と呼べる厳しい環境でしたが、営業先で「滋賀大出身です」と言えば途端に間合いが縮まり、我が母校には何度も助けられました。お客様からすると地元とは言えない銀行を選び、取引して頂けるやりがいを感じながら、ゼロから支店を築く過程に携われたことは得難い経験でした。

二つ目は東京支店での勤務です。個人営業から法人営業に変わり、しかも相手は上場企業を中心であったことから、取扱う金額が2桁・3桁も増え最初は驚きました。担当先は



社会人1年目

ピカピカの企業ばかりではなく、リーマンショックの発生により業績が厳しくなった中小企業もありましたが、じつくりと向き合いました。法人営業の深さ面白さを味わいました。また、地元志向の強い私ですが東京で3年間を過ごし、公私両面で視野が広がりました。

これまでの10年間を振り返り、銀行の仕事の面白みを一つ挙げるとすれば、それは、多くの業種の方々に接すること、特に経営者と話しが出来ることに尽きます。お客さんと銀行が長く良い取引関係を築くには、簡単なようで難しいのですが、相手への関心を持ち、じつくりと話しを聞き、しっかりと理解することが、基本であると考えます。

在校生へ

皆さんには学生時代の4年間で「見える力」と「見えない力」、この

二つを伸ばして欲しいと思います。「見える力」とは語学力、資格、部活動の実績やゼミでの研究結果など、他の人に「私はこんなことが出来ます、やりました」と明確にアピールできる強みであり、就職活動や社会人となった後でも大きな武器になります。

「見えない力」とは自分で考え、判断する力であり、他の人には見えませんが、経験を通じて育むことで、各自の土台となる部分です。

社会人として活躍していく上で、スタート段階では「見える力」のウエイトが高いかもしれませんが、徐々に「見えない力」の実力が発揮されていきますので、学生生活の中で色んな壁にぶち当たり、いっぱい悩んでください。

最後に、滋賀大学はコンパクトな大学であり、同期・先輩・後輩との結びつきが強いことから、そこで培われた絆は大事にしてください。皆さんが学生生活を有意義に過ごし、彦根で育んだ力をばねに大きく飛躍されることを願っております。



休みは良いパパです

ゼミナール紹介

★ゼミナールとは

通常ゼミナール、略して「ゼミ」と呼んでいる授業は、「演習Ⅰ～Ⅳ」といった一連の4つの授業科目を意味し、これらの科目は、2回生の後半に各学生の選択希望に基づき、受講クラスが決定されます。3回生春学期から授業が始まり、以後継続して4回生秋学期までの4セメスター連続して履修することになります。

「ゼミ」では、各教員がクラスを受け持ち、2年間、同一のクラスで同一の教員が、担当の専門分野の学問的内容について受講生の学習、研究を指導することになっています。

ゼミは少数数教育の授業科目ですが、クラスでの研究報告、発表を担当することで主体的な学力とプレゼン能力が養われます。また、クラス内での議論や共同研究、報告の準備作業、ゼミ生間の日常の交流などを通じて、論理面だけでなく総合的なコミュニケーション能力や人間関係を形成する力も培われます。それゆえ、ゼミは大学4年間の後半に配置されている主要な授業科目であり、専門教育としてだけでなく、ゼミ担当教員が学生生活や進路の相談、指導を行うことで、学生指導の面からも総合的に重要な役割を果たしています。

二宮ゼミナール

入って良かったと思ってもらえるゼミに

講義による専門知識の修得は勿論大切ですが、大学での学習の醍醐味は何と言ってもゼミ活動にあると考えています。私自身、大学、大学院を通じて素晴らしい指導教授に出会い、良い教育を受けることができた感謝しています。私ができるような教師であるかと問われれば、非常に心許ない面も多々ありますが、二宮ゼミに入って良かったと多くの学生諸君に思ってもらえるようゼミ活動には特に力を入れていきます。今年度は、3回生14名、4回生14名、大学院生1名で活動しています。

他大学との対抗ゼミ

主な活動内容は、同志社大学、大分大学との対抗ゼミです。対抗ゼミでは、金融、証券に関するテーマを設定し、肯定派、否定派に分かれて研究報告、討論を行います。スライドの作成等の準備はかなり大変で、正規のゼミの時間だけではとても時間が足りません。学生諸君が自主的に集まって議論をしたり、夏季休暇中にもゼミを行ったりして準備をしています。大変な作業ですが、この作業を通じてゼミ生同士が仲良く natte いるようです。討論会では厳しい質問もあり、的確に回答しなければなりません。審査は4回生が担当し、評価をするという経験をしてい

ます。

他大学との交流は、学生諸君には良い刺激になっていくようです。同志社大学との対抗ゼミは今年度で8年目ですが、滋賀大学の学生は研究報告等の準備はしっかりしているが、討論は弱いという傾向が見られます。勝敗は五分五分ですが、研究報告で稼いだポイントで逃げ切るというのが滋賀大学の勝ちパターンとなっています。滋賀大学の多くの学生のポテンシャルは非常に高いのですが、ゼミで自発的積極的に発言することは少ないように感じています。

OUT-PUTterz

ゼミの学生諸君には、『OUT-PUTterz』の学生諸君には、『OUT-PUT』するのは思考の完成品だけでなく、むしろ思考の製造過程そのものだとむしろ思考の製造過程そのものだということである。思考の製造過程はもちろん不完全であり、そのOUT-PUTはしばしば「恥を晒す」ことにもなりかねない。しかしながら、これは全く「恥」ではなく、思考の過程をOUT-PUTしないことこそ研究者にとって恥である。』ということを常々伝えていきます(ここの、OUT-PUTは、論文を公表するということ)。これは私の尊敬する先生の教えで、研究者としての心構えを説いたものですが、学生諸君にも間違っていない良いからOUT-PUT(発言)をしないさいと指導をしています。勿論、この教えは私自身への戒めでもあります。

対抗ゼミは、準備が大変で緊張したけれどやって良かったという感想をよく耳にします。また、就職活動

にも直接的、間接的に有益であったという話も聞きます。その他、石井記念証券研究振興財団からゼミ助成を獲得し、東証アローズの見学等も適宜行っています。このような活動により、ゼミを通じた生涯の友を得、二宮ゼミに入って良かったと思っ

てもらえれば望外の幸せです。ゼミ活動につきましても、私のHP(ftp://www.biwako.shiga-u.ac.jp/sensei/k-nino/index.html)でも紹介しております。併せてご覧頂けましたら幸いです。

ゼミ生の進路先(過去3年)

- 三菱東京UFJ銀行、中部精機、JA愛知信連、フューチャーレイズ、京都銀行、大日本防虫菊、愛三工業、河村電器産業、元林、三井住友銀行、中国ターミナルサービス、大成社、ニッセイアセットマネ



大分駅前

大分大学との対抗ゼミ ↓同志社大学との対抗ゼミ



ジメント、滋賀銀行、長浜信用金庫、大阪ガスファイナンス、ユーハ味覚糖、大阪信用金庫、京都信用金庫、湖東信用金庫、鈴与商事、大垣共立銀行、但陽信用金庫、イオンクレジットサービス等

宗野ゼミナール

社会に対する学生の関心

本ゼミナールでは、私たちが日々の生活や報道を通じて触れるさまざまな時事的問題を、政治学や行政学の見方から捉え、議論しています。検討するテーマは、三名ないし四名の学生からなるグループで決定します。たとえば、あるグループはワイクライフバランスへの関心から「福祉国家とオランダの労働政策」をテーマとし、別のグループは地方都市の交通政策を考えるために「まちづくりの日米比較」をテーマとし、ゆとり教育の功罪を改めて考えるために「理想の教育」を論題にするグループもある、といった具合です。

このように、学生たちの関心は実に多岐にわたり、私が専門的知識を動員して指導できる範囲を超えるものもあります。そのため、学生たちには、どのような現象にどのような視点からアプローチするか、どのような資料・文献をどう読むべきか、どのような論点がゼミ全体の知的関心を喚起するか、といった基本的な作法を伝えるように心がけています。

学生たちの教育環境

本ゼミナールの一学年の学生数は、だいたい一五名ほどです。したがって、三回生と四回生を合わせると、三〇名前後のゼミ生が在籍していることとなります。

グループごとの研究調査と報告を行うのは、三回生期の一年間です。三回生は、グループでの報告にそなえて、ゼミの本課とは別に、週二時間程度のグループミーティングを行っているようです。各自が研究報告テーマに関する資料文献を持ち寄り、共有し、論点を明確にしていく作業を繰り返すのです。このような進め方を採り入れたのは四、五年前であったと記憶していますが、学生たちの意欲と能力を引き出すにはよい手法ではないかと自負しています。

小グループでの議論やアイデア交換を可能にする空間が、本学でも着実に整備されてきています。図書館やIT環境の充実はいまでもなく、複数の学生が長時間にわたって議論に没頭できるラボトリー的な空間が、徐々にではあるものの、構築されてきているのです。インターネット全盛の時代、ファイルの交換で情報のやり取りはできますが、みな一つ一つの空間に集い、互いに顔を見て議論することが大切であると思えます。本学に寄られる機会があれば、ぜひ「学習支援室」や「Learning Laboratory」などのラボ空間を見学してください。本ゼミ生だけではなく、多くの学生が集まっ

勉強している様子をご覧いただけるはずですよ。

就職活動

さて、ゼミの学生諸君が熱意をもって勉強に取りくむ様を描いてきました。これは、決して誇張ではありません。ただし、留保すべきことがあります。就職活動や公務員採用試験に向けた準備が本格的に始まると、大学での勉強がおろそかになりがちなのです。四回生期の春学期は、学生の出席率が極端に悪くなります。この間、民間企業志望者は毎日のように会社説明会や採用面接に出かけ、公務員試験組は寸暇を惜しんで受験勉強に励んでいます。自身の進路、生きる方途を確定するので、就職活動や受験勉強を責めることはできません。しかし、おそらくは人生においてもっとも感性的



ゼミでの活発な議論の様子



論文執筆と卒業

就職活動や公務員採用試験を終えた四回生が落ち着きを取り戻すのは、秋学期が始まる頃です。いや、卒業論文という関門を目前にして茫然としているというべきでしょうか。特に、就職活動終了後無為に「遊んで過ごした」学生に、この傾向が強いのです。

しかし、そこはさすが滋賀大生、多くの学生がゆつくりとはあれ卒業論文の準備を始め、やがて執筆の面白さに気づきます。数十冊の専門書や高度な論文を読み込み、見事な論文を仕上げる学生もいます。まさに「大化け」です。論題もこれまた様々で、「なぜ大学で学ぶのか」といった自身の来し方を顧みるようなものもありますし、「人間にとって社交とは何か」といった領域横断的な論題もあります。

若い人たちと接していると、「勉強して、この人たちは成長するのだな」と実感します。今年も、卒業を前に学生たちが「大化け」する季節がやってきます。今から楽しみですよ。